

泣き寝入り

野上 恵

先日、朝日新聞「声」の欄に読者から我が子を怒鳴って叱っていたら虐待を疑われ近所の人に通報されてしまった、という実の母親本人の投稿が載っていた。もちろん誤解であったのだが、私もこどもの頃は、よく叱られた。

叱るのは、母ではなく祖母であった。

祖母は、香具師（露店商）の女房だった人だけに男勝りで気が強く、気短でもあった。用を頼まれたらすぐに「ハイ」と言って即行動しなければ大目玉である。

「恵、豆腐買って来ナ」「うーん」

漫画に夢中になっている私は生返事する。

生返事は、すぐにバレルものである。

「いつまでグズグズしてるんだ、行くのか、行かないのか、行きたくなきゃ行かなくてイイ、母ちゃんが行ってくんから」

「今行こうと思ってたんだよ」

「思ってた、じゃないだろう、言われたらさっさと行くんだ、アア、もうイイ、イイ、だいち『うーん』じゃなくて『ハイ』だろうが」と、ものすごい剣幕でまくし立てる。

怖い人であった。

わけあって、母方の祖母に育てられていた私を、祖母は不憫に思うのと将来を案じてか、しつけには人一倍厳しかった。

とりわけうるさかったのは、「時間」である。とにかく遊びに出たら「暗くなる前に」家に帰ることである。

昭和三十年代、こどもの遊びと言えば病弱でもない限り外で遊ぶのが当たり前だった。缶蹴り、なわ飛び、竹馬、花いちもんめ。時間を忘れて遊びに夢中になっていると、いつの間にか日が暮れる。

誰かが「家へ帰ろうかな」と、言い出すと「オレも」「あたしも」で次々と家路に急いで行く。

皆が帰って行く姿を見送るように、なぜかその場にひとりグズグズ残っている私。

「暗くなる前に帰ってくんだよ、いいね」と出がけに祖母から念を押されたにもかかわらず相変わらず足取りは重い。

重い足取りは、町の灯りが点り始めてようやく早くなる。早くなくても、もう、後の祭りである。

玄関には、鬼の形相で祖母が立っている。

「いつまで遊んでんダ、あんだけ早く帰って来いって言っただろう」と、言うが早いか、「ごめんさい、ごめん」と、泣きながら謝っている私の襟首ひつつかんで有無をも言わず「押し入れ」に放り込まれる。

ご丁寧に外からは、つかい棒までして中からは、あけることができない。

中は、暗くてカビ臭い、ねずみでもいるのだろうか、時々「カタ、カタ、カタカタ」とどこからか音がする。

周りは、モノが積まれ身動きもままならない。ままならない分、涙はちっとも止まらない。そのうち泣き疲れと昼間の遊び疲れからか気がつけば「泣き寝入って」しまう。

目が覚めれば、げんきんなもので今度は、お腹の虫が鳴き始める。

閉じ込められた襖の隙間に夕げの匂いが入り込む。

「ギル、ギル、グー」と、お腹の虫の鳴き声は、さつきより大きくなる。

隙間にそっと両手を入れてみる。「スル、スル、スルスル」と、あかない筈の戸はあいていく。「早くご飯食べちまいな」と、昼間の声とは違う祖母の声が台所から聞こえる。

急いで卓袱台ちゃぶだいにじり寄り温かいご飯をかきこむ。おかずは。

こういう時のおかずは、なぜか私の大好きな「コロッケ」だった。

寝る子は育つ。

こども時分は、不思議とよく眠くなる。

さんざん夕寝をしたくせに、夜は、昼間の出来事をすっかり忘れたように再びぐっすり寝入ってしまう。

この時、寝入った場所と言えば、確か、祖母の「布団」の中だった気がする。